

東北法学会報

第 38 号

令和 2 年 6 月 26 日 発行

編集兼発行者

東北法学会

代表 成 瀬 幸 典

発行 所

仙台市青葉区川内 27-1

東北大学法学部内

東 北 法 学 会

http://www.law.tohoku.ac.jp/research/thg/

題字は故高柳真三会員

報告

政治思想史における立法者——

マキアヴェッリ・サヴォナローラ・プラトン主義

東北大学教授 鹿生子 浩 輝

1. はじめに

—マキアヴェッリの

プラトン批判

ニッコロ・マキアヴェッリは『君主論』で、君主がいかに統治すべきかを論じている。彼はその中で、伝統的な政治理論家たちが理想を追うあまり、現実を見ていないと批判しており、この理論家たちの中には古代の哲学者プラトンが含まれていると考えられる。ところが、マキアヴェッリの著

2. 立法者論

マキアヴェッリの著作には、少なくとも2つの立法者論がある。

作には、ほとんど超人的な優れた君主（立法者）に関する考察があり、それは、プラトンの「哲人王」を思わせる。いったいこのことは、何を意味するのだろうか。ここではマキアヴェッリとプラトン（あるいはプラトン主義）との関係を検討したい。

第1は、『ディスコルシ』第1巻第18章の議論であり、それによれば、国家の腐敗を墮落する克服のために絶対的な権力を持つ君主が必要である。従来の多くの研究は、この議論を根拠としながら、マキアヴェッリが腐敗のない自由な共和政を実際に祖国フィレンツェで打ち立てるべく、一時的にせよ、絶対的な君主の登場を期待していると解釈してきた。

しかし、マキアヴェッリはその議論で、イタリアのローマニア地方のような場所を想定しており、フィレンツェを想定しているわけではない。彼によれば、ローマニア地方は、不平等があるがゆえにフィレンツェよりもはるかに腐敗が深刻な地域である。しかも、絶対的な君主は、その権力を公益のために用いる善良な人物でなければならぬ。ところが、彼の見るところ、この立法者を現実政治で期待することは難しい。そのう

目次

政治思想史における立法者—マキアヴェッリ・サヴォナローラ・プラトン主義 (鹿生子浩輝) …… 1
民事訴訟のIT化に対する弁護士会の対応状況等 (鈴木 覚) …… 3
民事訴訟手続のIT化について (秋吉淳一郎) …… 4
学会記事 …… 6
編集後記 …… 6

え、彼の指摘によれば、腐敗の克服のためには二代連続で並外れた名君が登場する幸運に恵まれなければならぬ。そこでの考察は、腐敗克服の実現可能性を否定する形で終わっており、それは純理論的な思考実験だと解すべきだろう。

同様の立法者論は、彼の親友フランチエスコ・グイッチアルデーニの著作にも見出せる。彼によれば、フイレンツェの腐敗克服のためには武力を用いる大胆な改革者が必要であるが、そうした人物の登場に期待を寄せてはならない。彼は、こうしたプラトンの構想が非現実的であると読者に警告している。

3. 人間性の回復

では、いったいなぜ彼らは、抽象的であるにせよ、そうした議論を提示しているのだろうか。その解明のためには、当時の政治状況と政治的理念に着目する必要がある。修道士ジローラモ・サヴォナローラは、メデイチ家がフイレンツェから追放された1494年以

降、その都市の精神的指導者となった。彼は、民主政を打ち立てるとともに「虚栄の焼却」などの道徳的政策を進めた。

サヴォナローラの立法行為は、人間を墮落以前の理想的状态へと回帰させようとするキリスト教理念に基づいている。彼の終末論的見解によれば、市民が正しい生活を送り、神の恩寵が訪れるならば、人間の原初の本性が回復されるだろう。しかし、彼が自覚していたように、墮落の克服には長い年月がかかる。この修道士は、失脚し、処刑された。

マキアヴェッリとグイッチアルデーニは、この「武装せざる預言者」の政治的失敗を知っており、同様の試みは不可能だと認識していた。にもかかわらず、当時、腐敗の克服を目指す慣例的思考があったために、彼らは、その知的課題に応じた作業に関与したと見てよいだろう。しかもその知的探求は、フイレンツェにおけるプラトン主義の高まりと密接に関わっている。

4. プラトン主義の影響

マルシリオ・フィチーノらは、プラトンの著作を熱心に研究していたが、異教徒プラトンの主張が実はキリスト教の真理を暗に指示している」と解釈していた。フィチーノやその弟子たちは、サヴォナローラと強い影響関係にあり、プラトン主義者の一部は、サヴォナローラをプラトンの哲人王と重ね合わせていた。神から啓示を受けたキリスト教の預言者は、立法者でもあり、真理（イデア）を把握した哲人王に相当すると考えられていたのである。

マキアヴェッリは、当時のこうした認識を把握しているように見える。彼のもう一つの主な立法者論たる『君主論』第6章では、預言者モーゼは、ローマの建国者ロムルスなどともに、武装した超人的立法者である。その失敗例がサヴォナローラである。同章によれば、この修道士は、武装していなかったがゆえに失敗した。先述のように、サヴォナローラは、神と語った預言者であり、かつ哲人王

的立法者として解釈されていたとすれば、マキアヴェッリの立法者像は、当時の馴染み深い理想的立法者像を自らの議論に形式的に取り込んだものと言えよう。

ところが、マキアヴェッリの立法者は、もはや真理に即しているわけではない。自ら神の真理に与っているという虚偽も用いねばならない。この考察は、真理を体現する立法者を要請する当時の読者にとっては大きな衝撃を与えるものだろう。

